

山麓をわたる風 No. 1

平成30年7月4日発行

H30年度日本遺産に決定！！ ～「星降る中央高地の縄文世界」～

5月24日に茅野市を含む長野、山梨両県の14市町村が共同申請した「星降る中央高地の縄文世界—数千年を遡る黒曜石鉾山と縄文人に出会う旅—」が日本遺産に認定されました。

茅野市では、これまで縄文を活かした新しい街づくりのための縄文プロジェクトがすすめられ、小中学校では、縄文人や縄文文化からの学びをこれからの生き方にかす縄文科の学習が行われています。昨年は八ヶ岳 JOMON ライフフェスティバルが行われ、県内外、市内から多くのお客さんが参加し、～「生きる」はもっと素直でいい～縄文世界の時間の流れや豊かさを実感することができました。

このように、今、茅野市や近隣市町村の縄文文化が日本中から注目されてきています。

一方で、見えていても気づかれず、まだとり上げられていない縄文の“宝物”が、私たちのすぐ足もとにたくさん眠っている気がします。現在行われている縄文科学習での「自立」「協働」「創造」をめざした子どもたちの学びのようすや、茅野市の縄文に関する情報をお伝えしながら、縄文文化の豊かさや縄文人の生き方、ものの考え方を共有できたらと考えます。

◆寄稿

ものへの興味と観る力

尖石縄文考古館館長 守矢昌文

集める楽しみ 誰しもが“ものを集める”一蒐集癖を多かれ少なかれ持っている。特に幼少期に、「きれいなキラキラしたもの」や「珍しいもの」を集め、他人から見れば価値のないものでも自分の“お宝”として蒐集した記憶を持っているだろう。



江戸時代でも、ものを蒐集し“めでる”ことは風流人の間で盛んに行われ、石器蒐集の木内石亭きうちせきてい、土偶蒐集の蓑虫山人みのむしさんじんなどの好事家がいた。このような例を挙げなくても、いつの世でも考古遺物は、切手やキャラクターカードの蒐集と同様なコレクションの対象で、蒐集癖を満たすアイテムであった。

自分も蒐集癖から考古遺物蒐集をしたが、当時考古遺物以外にも昆虫採集、岩石採集等様々なものを蒐集することが普通で、夏休みの研究作品として出品された。そんな時代を過ごしてきた。当時はまだまだ身の回りに“宝”が散らばっている環境が残っていた。

考え、想像する 蒐集したものが何か、いつ頃のものが、それを調べ・学ぶ環境が諏訪地域には整っていた。尖石遺跡をはじめとする縄文遺跡が身近にあり、尖石考古館等の考古館、宮坂英式先生・藤森栄一先生等の考古学者がおり、併せて当時考古学好きな者が大勢いたことは、蒐集したものが何か、その価値を調べるのに好都合な環境であった。



チッ原遺跡

観る力を養う 蒐集品をめぐるだけでなく、そのものがいったい何であるかを探るには、観る力が求められる。多くのものを見て、触ったりする等の実体験の場もまた、身近にはあった。当時昭和の高度経済成長期に伴う開発ラッシュで、至るところで遺跡発掘が行われ、その現場を間近に観ることができたことは、観る力を養うことにつながった。



集め、観て識る機会が、当時は周辺に残っていたが、現在はそのような場面も減り、当時のように学ぶことが、難しい時代になってきているのかもしれない。

今、中学校の縄文科では・・・考古館で縄文土器のデザインをスケッチ

北部中学校1年 6月14日(木)

・北部中学校の1年生は、茅野市青少年自然の家での宿泊学習の折、縄文土器文様をスケッチする活動を行いました。課題は「自分の印象に残った縄文デザインをスケッチしよう」です。考古館を訪ねてみると、物音ひとつしない静けさ中で、土器や土偶を見つめて集中してスケッチする北部中1年生の姿がありました。



巨石「とがり石さま」 説明を聞き、スケッチするという行為をとおして土器文様や器形、モチーフや造形の仕方など、制作した縄文人の工夫や意図を感じることができたのかもしれない。約5000年もの時を超えて、縄文人の心に近づける時間になったのではないのでしょうか。

北部中学校では、昨年度より縄文の土器文様をモチーフにデザインし、そうしたデザインを市や市民のために活かす試みが始まりました。こうした活動を発展させて、総合的な学習では、

「故郷とともに生きる～私たちにできる事」がテーマです。

自分の故郷や住んでいる地域のことを詳しく調べて、地域の課題をつかみ、解決の方向を提言する活動が展開されました。

3月末の長野日報には3年生(当時)の島立さんの活動が紹介されています。島立さんは自分の住んでいる糸萱のバス運行が少ないことに着目し、バスの増便の提言は難しかったけれど、糸萱に興味をもってもらえるバス停の看板制作を思いつきました。地域特産の「糸萱かぼちゃ」と毎年公民館の庭にきれいに咲くコヒガンザクラの顔付きキャラクターをデザインしました。市の協力で、原画から看板を制作し、現在リニューアルしたおしゃれな色合いの看板がバス停を飾っています。

(写真 長野日報ウェブより 本文 同ウェブを要約)



◆ 縄文科学習の学びから

H29 ハケ岳 JOMON ライフフェスティバルから～地域の方々との楽しい交流、そして学び
～「生きる」はもっと素直でいい～企画や地域の方々との交流の中で多くの学びが生まれました。

◇市民館 「縄文アート」 平成 29年 10/1 (日) ～10/22 (日)



☆子どもたちの土偶など、1000以上の作品が飾られました。

◇「夜の火祭り・・・土器の野焼き」 10/7 (土) 尖石遺跡広場



☆「ほら、あそこに私の土器があるよ」

☆時間がゆったりと流れ・・・

市内の小中学校から子どもたち約70名と、保護者、学校関係者の皆さんが参加しました。

◇「縄文かるた大会」 10/15 (日) 青少年自然の森体育館



☆「う～ん、判定が難しい！」一生懸命にかるたをとる子どもたちの姿に、役員さんも満足げ

◆縄文耳より情報（例）

◇「住宅建築予定地から竪穴住居址が」〔湖東山口区〕

▽遺跡名 ^{つじや}辻屋遺跡 湖東山口（中村との境）^{なかっぱら}中ッ原遺跡から
尾根ふたつほど南

・発掘状況 （4月末 発掘終了）

縄文時代中期のもっとも豪華な土器が作られた時期の住居の跡が2軒発掘されました。1軒の住居からは土器や石器がたくさん出土していました。床面ばかりでなく、住居跡を覆う黒土の中からも多くの土器等が見つかり、住居がいったん廃棄された後に埋められたのではないかと教えてもらいました。

きれいに形が整えられた磨製石斧が1点と簡素な土偶らしき粘土製の塊が出土していて、単なるゴミ捨て場ではなく、何か意味をもって埋められたものではないかというお話でした。当時の生活のようすがいろいろと目の前に浮かんできます。

この頃は、開発事業が少なく、発掘作業を見学できる機会もたいへん少なくなっています。5000年前の掘り出されたばかりの生の住居址を見学することができ、見ごたえがありました。住宅建築のための緊急発掘ですが、身近で実際の発掘現場を見ることは他の地域ではなかなかできません。

近くで発掘作業が行われていたら、担当の方の許可を得て見学してみたいはいかがでしょうか。



第2号住居址…多数の土器、石器が出土



ところが、1号住居址…土器、石器類はほとんどなし



立派な磨製石斧が出土



2号住居址…土器、石器が多数出土